

君はもう砂になった

積戸バツ

—第一章—

家の廊下、こんなに長かったっけ。

一步、また一步と足を運ぶたび、古びた床板がぎしりと音を立てる。窓から差す冬の光は薄くて冷たく、肩に羽織ったコートの裏地がひやりと肌に触れた。

東京での仕事を辞めて、新潟に戻ってきたのは二週間前だった。

あの日、理由を説明する気力もなく、「ちよつと疲れたから」とだけ言って、実家の布団に潜り込んだ。

スマホも触らず、ニュースも見ず、ただ天井を眺めて一日を過ごす日々。

最初のうちは、私を心配してか色々言ってきた。

特に母は少しだけ困ったような顔をしていたけれど、それも次第に何も言わなくなった。

私は、窓の向こうに流れる鉛色の雲を見ていた。

ここが「戻ってきた場所」なのか、「落ちてきた場所」なのかは分からない。

ある日の昼過ぎ、なんとなしに玄関の扉を開けた。

思えば、家の外に出るのは、帰ってきてから初めて。

何日か前に母から「茉莉まつり、たまには散歩でもしたら？」と促されたが、その時はまだ外出しようと思えるほど気持ちが浮かんで来なかった。

呼吸が早くなるのを感じながら、マフラーを首に巻く。コート袖口に指先を隠すようにして、玄関のドアを閉めた。

「さつぷ……」

冬の空気は、驚くほど尖っていた。

灰色の雲が空を覆っている。遠くで日本海が鳴く声がして、思わず立ち止まった。

自転車を少し漕ぎ、海沿いに出た。

日和山展望台を登ると荒れた日本海が見える。加えて、車の通りも人の通りもほとんどないのも分かる。

ふと、展望台の足元に人影が見えた。

長い黒髪を揺らして立っていたその人は、信じられないくらい自然に、私の名前を呼んだ。

「——ちゃん？」

声は風に混じっていたのに、はつきりと耳に届いた。

目を凝らす。あの顔。あの立ち方。

——百瀬ももせ、遥はるか。

時間が一瞬、逆再生されたようだった。

制服を着て自転車を並べて走った放課後の帰り道。昼休みに交換した手紙。海岸で聞いた彼女の声。

何年も連絡を取っていなかったはずなのに、目の前の遥は変わっていなかった。大人びた服を着てはいるけれど、あの頃とまるで同じ笑い方で手を振った。

「元気……そうでもなさそうだね。でも、変わらないね」

どう返せばいいか分からなかったから、とりあえず小さくうなずいた。

遥の瞳には、どこか水面のような揺らぎがある。懐かしさと、少しの怖さ。触れたら崩れてしまいそうな、不思議な透明さ。その瞳で見つめながら、遥は言う。

「良かった。久しぶりに、会えて」

「……うん」

「ねえ、今日は難しいから、明日。少しでもだけ、付き合ってくれないかな。ちょっと行きたいところがあつてさ」

その誘いは、不思議なほど自然に聞こえた。

人と会う約束なんて、もう何ヶ月もしていなかったのに。

「いいよ」とすつと声が出た。

その言葉が、喉の奥から出てくるのを、自分でも驚いてい

た。

風が吹き抜けると、遥の髪がふわりと宙に浮いた。

あの頃よりも細く、でも確かにそこに在る彼女を、茉莉はじっと見つめていた。

そのとき、自転車のブレーキ音が鳴り、遠くから子どもの笑い声が響いた。

遠くの方で、誰かが赤い傘を振っている。

町は、生きている。

——自分だけが、止まっていたのかもしれない。

約束を交わして帰り道につく頃には、指先の震えも止まっていた。

この町の冬は、まだ冷たいけれど。

どこかで少しだけ、自分の中にも風が吹き始めたような気がした。

—第二章—

次の日。

約束の時間より少し早く新潟駅に着いた私の前に、遥が姿を見せた。

これから向かうのは、バスで少し離れた住宅地の中——西

総合スポーツセンター前。

駅前の喧騒とは打って変わって、そこには静けさが広がっていた。低く垂れ込んだ曇天が見渡す限りの家々の上を覆いつくしている。鉛色に染まった重たい風景が、昼の時間に似つかない気配を漂わせている。

「歩けそう？」

遥がこちらを振り返り、穏やかに問いかける。その声に私は、小さくうなずいた。

遥はすぐに前を向き、ゆっくりと歩きだす。細身の背中が、風でなびいているかのように揺れていた。その後ろ姿は、ほんの少しだけ年上に見える。確かに見える背中ではある。

けれども同時に、風と共にふと見失いそうな儂さも纏っているようだった。

密集した住宅地を離れ、足元に細かい砂が混じり始める。

前にここを通ったのは、いつだっただろう。幼い頃、誰かに連れられて一度だけ来た記憶がかすかに残っている。でも、それが本当にあった記憶なのか、単なる思い違いなのか、確かめる術はない。ただ、懐かしいような、落ち着かないような感覚だけが足元を揺らす。

やがて、銀色の砂防壁が空いている部分を抜ける。景色が急に開けた。

目の前には、どこまでも続く砂の大地と、その向こうに広がる灰色の海。空と地平の境目すら曖昧になるほど、全てが淡く溶け合っていた。

日本海特有の湿った風が体を撫で、耳の奥に潮の音が染み込む。

整備された遊歩道などはない。あるのは、ただの砂だけ。人の気配はまったくなく、砂丘と海と空が、静かに寄り添っていた。

「誰もいない……」

ぼつりと漏れた声に、遥が歩みを止めて、こちらを振り返った。

「うん。ここ、地元の人もある来ないんだよ。釣りとか海水浴の季節ならまだ人も来るけど、今は季節外れだから」

「……ずいぶん静かだね」

私がそう言うと、遥は緩やかに笑みを浮かべ、海の方を見つめる。

「そう。ここ、私のいちばん好きな場所なの」

透き通った言葉に嘘はなく、その眼差しはどこまでもまっすぐだった。風に長い髪がほどけて、彼女の輪郭を曖昧にし

ていく。

「ちなみにね、このあたりの砂浜や住宅地を含めた一帯、『新潟砂丘』って言うんだって。実は、鳥取よりも広くて、日本一の砂丘なんだってさ」

私はその横に並び、砂を踏みしめながら海の方へ視線を向けた。

冷たい潮風が緩やかに頬を掠めていく。刺すような冷たさではなく、じんわりと肌に馴染んでくる種類の風。色の無いその風の中で、遠くの海が黒々と揺れている。深く、静かに呼吸をするように。

「……なんか、世界から取り残されたみたい」

そう呟いた私の声に、遥がふっと笑う。

「でしょ？　ここ、時間が止まってるみたいなんだよ。たまた、自分の輪郭も溶けていくような気がする」

輪郭が溶けていく――

その言葉は耳に残り、心の中に沈殿していく。

私は静かに目を閉じた。瞼の裏に、さっきまで見ていた景色がぼんやりと滲んで残っている。

潮の匂いと、絶え間ない風の音、そして隣にいる遥の、静かな存在感。

街の喧騒も、仕事の責任も、東京での暮らしも、何もかも

どこか遠くへ離れていく。

私はうつすらと湿つた砂を、そつと指先ですくつた。

細かくて、やわらかい。

それはまるで、自分の胸に積もっていた感情――

不安、焦り、自己嫌悪――

そういつたものたちにどこか似ていた。全てを抱えて、沈

黙の中に積もっていた感情。

「……ねえ、遥」

「ん？」

「私さ、最近まで、朝起きるのもしんどかったんだ。頭も体も動かなくて、ずっと家にいて、何もできなくて……だからこうして外に出ること自体、ちょっと信じられないの」

遥は何も言わない。ただ、私の言葉を待ってくれている気がした。

私は砂を握つたまま、息を整えるように深く呼吸する。吐く息が、少しだけ震えていた。

「でも今、ここに立つてると……なんか、ちょっとだけ思っただよね」

「何を？」

「……生きててもいいかもしれない、って」

それを言葉にした瞬間、胸の奥にしまい込んでいた何か

が、そつと解かれる音がした。

声はわずかに震えていたけれど、遥は何も言わなかった。

ただ私の隣に立つたまま、遠くの空を見上げている。

雲が切れて、淡く光が差し込む。

その光は強くも弱くもなく、まるで誰かがそつと手を差し伸べてくれるような優しさを持っていた。

「……ありがとね」

その小さな言葉も、風に紛れて消えていった。遥はやっぱり何も言わなかった。けれど、それでよかった。

この沈黙の中にあるものが、何よりもその答えだったから。

風が吹いている。

砂丘の草が、サワサワと音を立てた。

この静けさと余白のような空間が、私の全てを包み込んでくれるような気がする。

私はただ、ここにもう少しだけ留まりたいと思った。

— 第三章 —

新潟の冬は、少しずつ足音を大きくして近づいていた。

毎年、雪が降ることを知らせる雷。その稲光と轟音は、昼

夜関係なく空の深奥から、町を打ち鳴らし、雲を割って冷気を降ろしてくる。鈍色の空は日に日に厚みを増し、時折、^{あられ}霰が屋根を打つようになった。

けれどその中で、私は少しずつ外に出るということを、誰の手も借りずに選べるようになっていた。

冷たい風に肩をすぼめながらも、分厚いコートが私にとつての鎧みたいなものだった。

最初は近所のスーパーまで。次に万代までのバスに乗ってみる。今度は思い切つて新潟駅まで足を延ばす。そうやって少しずつ、世界に対するハードルを下げていった。その心の支えになったのは、いつでも遙だった。

あれから何度か、彼女と一緒に街を歩いた。

マリニピア日本海では、日本海を模した大水槽で長い時間を過ごした。

遙はよく魚を見るたびに「あれ、スーパーで買ったらいくらぐらいするんだろうね」とか、「おいしそう。あの魚つて三階のレストランで食べられるんだよね」と言ってくる。まるで、水族館をひとり別のレイヤーで楽しんでいるように。

極めつけは、例のレストランで魚料理の定食を食べると「今食べた魚つて、さっきの水槽から取ってるのかな」と言

い出す始末。思わず吹き出す私を見て、遙は満足そうに笑っていた。

マリニピア日本海に行つたら必ず寄る場所がある。出口から少し歩いて見える、海沿いのリゾートにありそうな木製の建物。ポポロのジェラートは外せない。

毎日、その日限りのフレーバーが並ぶショーケースには、ミルク、シヨコラ、抹茶のような基本的な味はもちろん、季節のフルーツやラムレーズン、レアチーズケーキ、和栗やカボチャ、新潟らしい枝豆味のジェラートだつてある。一年を通して「通つてしまう味」がそこにはあつた。

「遙は何にする？」

私自身、全然決まらないので、彼女に問いかける。

「秘密。茉莉が決めてから注文するもん」
なんて意地悪な。

目が合うと、二人して自然と笑いあつた。

結局、私は一番人気の「しぼりたて牛乳」と十二月限定フレーバーの新潟県産高級洋梨「ル・レクチエ」のダブルをコロンで。私が決めてからと言つていた遙は、被らないようにしたのか、苺ミルクとレアチーズケーキを選んだ。

ストローブが近くにある席に二人で座る。スプーンで掬った

それを口に運ぶ。思わず笑顔になる。口の中は冷たいのに、なんだか温かく感じた。心の奥へとゆっくりと染みていく甘さ。あれは確かに幸福の味だった。

万代シティでは、今となつては全国的に知名度が上がつた万代そばのカレー、通称「バスセンターのカレー」を食べる。冷たい空気の中食べることこそが、このスパイシーでまつたりとした黄色いカレーには最高のシチュエーションだと思っている。普通盛りを選ぶと胃の容量的に厳しいので二人ともミニサイズ。いや、ミニサイズと言つても、女性にとつて満腹になつてしまうほどの量であることには変わりない。

しかし、万代シティに来た一番の理由は、二人で観たい映画があつたからだ。

新潟駅では、ぼんしゅ館で買ったおにぎりを食べたこともあつた。彼女は少し涙目になりながら「神楽南蛮味噌が正義」とか言つて、やけに満足そうな顔をしていた。

いや、辛くてむせてんじやんか。

就職を機に上京した時とは大きく変わった新潟駅を満喫する。ラーメン街道に様々な新潟名物売っているショップ。特にお気に入りだったのは、ヤスタヨーグルトのブース。

飲むヨーグルトと言えども、さらさらのヨーグルトではなく、濃厚なクリームとヨーグルトを足して二で割つたような味の新潟のご当地ドリンク。それがアイスになっていた。「これ、東京に売つてなくてめっちゃ恋しかったのよ」と私が言う。

すかさず遥は「え、これ全国どこでも買えるんじゃないの？ コンビニでも普通に買えるじゃん」と言ってくる。

そう、コンビニで買えるのは新潟県だけなの。東京だと、アンテナショップに行くしかないのよ。

普通の日常。

何の特別もない、ありふれた時間。

けれど、私にとつては、とても大切な記憶になつていた。

毎回の別れ際、遥はいつも「また来週も、遊びに行かない？」と言ってくれる。

体調の波で応えてあげられないこともあつたけど、それを断る理由なんてどこにもなかった。

彼女と過ごしていると、自分がちゃんとここに存在していると感じられた。

けれど、その感覚は、ある日を境に揺らぎ始めた。

きつかけは、些細なLINEだった。

久しぶりに、かつての同級生——中学と高校が同じだった相手に連絡を取った。

年に一度、年末年始にだけ挨拶を交わすような間柄。たいした用事があったわけじゃない。ただなんとなく、最近の自分を誰かに話してみたくなった。遥のことも含めて。

「そういえば最近、遥とまた会うようになってさ。なんか変わってないなーって思ってた」

そう送ると、返事はすぐに返ってきた。

「……え？ 遥って、百瀬遥？ ……いや、嘘でしょ？」

嘘って、何が。どういうこと。

私はすぐに返す。

「百瀬遥って、あんたとずっと一緒に居た子だよ？ 中学の時の」

私は「そうだよ。どこの高校に進学したかわからなかったけど、この間、近所で偶然会ってさ」と返す。

そして、その返信を目にした瞬間、指先がかすかに震えた。

「……あの子、たしか、亡くなったって聞いたけど……？」

一瞬、意味が掴めなかった。

——亡くなった？

スマートフォンを持つ手が汗ばむ。

——そんなはずはない。

心臓が一度、変な音を立てた。

私はつい昨日も彼女と会っていた。新潟駅で中条たまごのプリンを買って帰った。彼女が「これ、絶対冷やしてから食べたい」と言っていた。今も台所の冷蔵庫にそれが入っている。

……なのに。

思い返す。

彼女と一緒に撮った写真は、一枚も無かった。

連絡先も、聞いていなかった。

LINEも、SNSも、通話の履歴すら何一つ残ってなかった。

私の記憶の中にいる彼女は、確かに笑っていた。話していた。触れられる距離にいた。

……私は、何を、見ていた？

スマートフォンの画面に映る、同級生からの文字列。

「ごめん、今更だけど、勘違いだったらごめん。でも、あの

子……数年前に事故で亡くなつたつて、聞いてたから」

空気が、冷たくなつた。

暖房の効いた部屋にいるはずなのに、指先がじんわりと凍えていく。

深く息を吐いても、胸の内の温度は戻らない。

——あの子は、本当に、ここにいたのだろうか。

そう思つた瞬間、それまで心の中でゆるやかに積もつていた安堵や幸福が、ひと粒ずつ、崩れ落ちていく感覚があつた。それはまるで、手のひらの砂が風にさらわれていくような、どうしようもなく儂い喪失だつた。

—第四章—

記憶というものは、時に曖昧で、都合よくできている。

だからこそ、あてにならないことがある。

確かにあつたはずの出来事や言葉が、時間の中で静かに歪んで、形を変えていく。思い出そうとするたびに、輪郭がぼやけていく。

遥とは冬の始まりに出会つてから、ほぼ毎週遊んでたし。一緒に出掛けて、一緒に美味しいものを食べて、一緒に買い物をして、一緒に——

遥のことを思い返していると、そんな曖昧な記憶の底に引きずり込まれそうになる。

——中学三年の春。卒業を控えたある日、私は遥と海沿いの砂丘を歩いてた。

その日は風が強く、頬に舞つた砂が当たつて少し痛かつた。

私たちは卒業式の予行練習が終わつた午後、放課後の校門で待ち合わせて、誰にも言わずに西海岸まで歩いた。黙つたまま歩く時間が妙に心地よくて、私はその沈黙を破ることができなかつた。

「茉莉ちゃん……私、この町に、飲み込まれたいな」

唐突に、遥が呟いた。海を見ながら、ぼつりと。

「ここで、全部溶けちゃえばいいのに。私も、町も、海も、空も……境界線がなくなつて、ひとつの風景の中に沈んでしまえば、何も怖くないと思う」

私は言葉が出なかつた。

何を言えればいいんだろう。今までそんなの思つたことないし。

茉莉の十五年の人生の中で、ただの一回も考えたことのないことを遥は言う。

励ませばよかったのかな。それとも、冗談かよって笑えばよかったのかな。

けれどその時の遥の瞳は、どこか遠くを見ていて、何物も寄せ付けない雰囲気を醸し出している。今は何を言っても届かないような、話しかけたら霧のように解けるような儚さを感じて、私はただ黙っていた。

その翌日から彼女は学校に来なくなった。しかし、先生たちは何も説明しない。

いくら問い詰めても、「家に連絡しても不在が続いている」とか、「転居の届け出が出ている」とか、そんな曖昧な言葉が返ってきただけだった。

クラスでは噂になった。ある人は「体調崩したって聞いたよ」と言うし、「いや、親の転勤らしいよ」という新説を唱える人もいる。しかし、誰も真相を知っている人はいない。

結局、遥は卒業式にも現れなかった。

私は……怖くて、ちゃんと向き合おうとしなかった。

遥の隣で西海岸を歩いた日、彼女の言葉をちゃんと受け取

ろうとしなかった。

自分には意味が分からない言葉だと思つて受け流してしまつた。

私とは関係ないふりをしていた。

それでもなお、遥がいなくなった理由を、知るのが怖かつた。

思えば、遥は昔からどこか浮世離れしていた。

「空気がまいになれたらいいのに」と、よく言っていた。

「人つて忘れ去られた時が本当の死なんだって」とも言っていた。

もしかしたら、誰にも気づかれずに存在することが、彼女にとつて理想の在り方だったのかもしれない。

——そして今、私の見ていた彼女は、本当に「生きて」いたのだろうか。

不思議と一緒に出掛けた時の事を思い出す。

万代で映画を観た帰りに、二人で歩いたバスセンターの構内。あの時、ふと感じたのだ。遥の足音が、ほとんど聞こえなかったことに。

あのジェラート屋で、一緒にいた時間は確かに温かくて、甘かつた。とてもいい思い出になった。けれど、一緒に写真

を撮ろうとは思わなかった。

思い返すと、レジでの会話も、店員とのやり取りも——遙が何かをしている記憶は、ぼんやりとしか覚えていない。

何より、連絡先を交換していない。

いつも「また来週ね」と言われるままに、約束の時間になると現れる。

けれど、いつも口約束でしかなかった。

LINEもSNSも何も知らない。

それでも、彼女は確かに隣にいて、私に笑いかけてくれた。声も、匂いも、手の動きも、全部、私の中に残っている。

気が付いた。連絡の手段は一切ない。

「……じゃあ私の体調が悪かった時、断りの連絡もしていないのに、次にどこへ行くかも約束してないのに、なんで次の週に会うことが出来たんだ？」

もしかして、私の見ていた遥は幻覚なのか

もしも彼女が「もういない人間」だとしたら——

私は誰と、何を見て、何を話していたのか

夜、布団に潜り込みながら、私はじっと天井を見つめる。

遥の声が、風に紛れて耳元に残っている。

——ここに、全部、溶けちゃえばいいのに。

思えば、今こうして彼女と再会した場所も、あの砂丘だった。

中学時代、最後に彼女を見たあの場所で。

眠れなかった。目を閉じると、遥の顔が浮かんでくる。

私は、ずっと彼女を「忘れなかった」つもりだった。

けれどそれは、自分の都合のいい記憶だけを切り取って、都合よく保存していただけなのかもしれない。

あの時、あの砂丘で何が起こったのか——。

本当は、私は思い出したくなかっただけなのかもしれない。

でも、もう向き合わなければならぬ気がする。

遥はなぜ、戻ってきたのか。

そして、あの日、別れた後に何が起きたのかを。

—第五章—

その日、新潟の空は驚くほど晴れていた。

よく新潟県民が言う「雨が降ってなければ晴れ」という地

域性のある意味ではなく、全く雲一つない快晴だった。

けれど空気が湿っていて、天気割には冷たい風がコート
の隙間から忍び込んでくる。

約束の時間より少し早く、私は一人で西海岸の入り口に
立っていた。

人の姿は見えない。もちろん、誰かと会う約束をしてここ
にいるわけじゃない。

耳を澄ますと、海の音だけが、遠くから一定のリズムで打
ち寄せてくる。

なんて落ち着く日なんだろう。

「待たせた？」

背後から穏やかな声がした。振り返ると、遥がそこに立っ
ていた。

いつもと同じ、けれどもどこか少しだけ、遠くを見つめて
いるような瞳。

「ううん、私が早く着いただけ」

そう言つて微笑むと、彼女も笑つた。

二人でゆっくりと、小高い道を歩き出す。

風が吹くたびに砂がさざめき、小さな粒がコートに当たつ
ては音もなく滑り落ちていく。冬の砂丘は静かで、誰にも邪
魔されない時間がそこにはあった。

「茉莉ちゃんさ、あのときのこと、覚えてる？」

「……どのとき？」

「中学の卒業間近。ここで、『全部溶けちゃえばいいのに』つ
て言つた日のこと」

私は歩みを止めた。彼女の言葉が、まっすぐに胸に届く。

「……覚えてる。すごくよく、覚えてるよ」

私はその言葉の真意、彼女の想い、その他諸々。いろんな
ことを確かめに来た。

「そっか」

遥はふわりと笑つて、また前を向いた。

「ねえ、茉莉ちゃん。私はね、たぶんもうこの町の一部なん
だと思うの」

彼女の声は、驚くほど自然だった。まるで「今日、珍しく
晴れてるね」みたいな話でもするみたいに。

「どういう……意味？」

「わかんない。ただね、この風とか、匂いとか、湿つた空
気とか……そういうものと一緒になつて、ずっとこの町にい
る気がするの」

私は黙つて、彼女の横顔を見つめた。

透き通るような頬。海風に揺れる髪。まるで、光の中に溶
けていくみたいだった。

やがて私たちは、日和山展望台の階段に差しかけた。

遥が「ちよつと登ろうか」と言うので、私は頷いて、そのあとを追う。

階段の一段一段が、やけに長く感じた。息を切らせながら登っていくと、頂上からは町と海が一望できた。

遥は柵の近くまで進み、海の方へ手をかざすようにして立ち止まった。

その背中に、私は少しだけ違和感を覚える。

輪郭がぼやけているような気が——いや、比喩的表現じゃなく、本当にぼやけている。

「ここ、好きなんだ」

「……私も、好きになったよ」

「それなら、よかった」

何を言われるんだろう。

正直、次の言葉を聞きたくないと思っっている。

遥が、振り返る。そして、小さく手を振った。

「ありがとう。茉莉ちゃん」

その声が、風に乗って届いた瞬間、私は反射的に目を閉じた。

まぶしかったのか、怖かったのか、自分でもわからない。

ただ、何かが溶けてしまいそうな気がして、そうするしかなかった。

そして、数秒後。

私はゆっくりと、まぶたを開いた。

そこには、もう誰もいなかった。

風だけが、変わらず吹いていた。

展望台の手すりに手をかけながら、私はしばらくの間、動けなかった。

どこかで、分かっていたのかもしれない。

この再会は——ずっと続くものじゃなかったことを。

遠くの海が、静かに波打っている。

私はそつと、手を振った。もういない誰かに向かつて。

ありがとう、と。

さようなら、と。

砂丘の草が揺れる音が、風の中に紛れていた。

空は、青かった。

八年前のあの日と同じ日に彼女は居なくなつた。

一ヶ月後、私は遥の実家にいた。

「古道具百瀬」と控えめに掲げられた木の看板。その下に、時が止まったような佇まいの店がある。

ガラス越しに差し込む薄陽が、棚の上の時計や食器、古いランプを、まるで人の記憶みたいに照らしていた。

「ここで、働かせていただけませんか」

そう頭を下げた。

遥の両親は私を佐々木茉莉と認識すると共に、笑顔で椅子を用意してくれた。

ふたりに、ここ数ヶ月のことを話した。

新潟砂丘のこと、マリニピア日本海での会話やポポロのジェラートのこと、万代シティで食べたカレーや観た映画のこと、新潟駅でのおにぎり論争やいろんなショップで買い物をしたこと——全部。

話しているうちに、ふと自分の声が震えているのに気づいた。けれど、止める気にはなれなかった。

遥のお父さんはぼろぼろと涙を流した。

遥のお母さんは何も言わずに、抱きしめてくれた。

それから分かったことがある。

遥は、あの日。

中学三年の春。私と砂丘で別れたその帰り道で事故に遭っていた。

なぜその事実を、私は今まで知らなかったのか。

転校だと、体調不良だと、自分の中で勝手に言い聞かせていた。

いくらでも、遥の両親に会いに行けば分かることだったのに。

本当は、知るのが怖かったのかもしれない。

それと冬に再会した遥が、幻だったのか、妄想だったのか、それとも何だったのか。

正直なところ、今でもはつきりとは分からない。

ただ、ひとつだけ確かなことがある。

心を病んで、何もできなくなつて、東京から逃げるように戻ってきた私の背中を、彼女は確かに押してくれた。

言葉で、時間で、笑顔で、沈黙で——。

ここに來てからの私は、朝起きて、制服に着替えて、棚を磨いて、商品に値札をつける。

お客さんと話すのはまだ少し怖いけれど、挨拶くらいはできるとなった。

それだけのことが、今の私には誇らしかった。

店を閉めて、裏口から外に出た。

街は、すっかり春の匂いに包まれていた。

息を吸い込むと、温かい空気の奥に、なぜかあの砂浜の匂いが混じっている気がした。

遥と歩いた、あの場所の空気。

もう彼女に会うことはないのかもしれない。

でも、いいんだ。きつと、あれでよかつたんだと思う。

空を見上げて、小さく息を吐く。

そして、心の中でそつと言った。

——あなたはもう砂になった。

でも私は、あなたが居てくれたおかげで、これからも歩いていけるよ。